

## 第5章 「話調」研究の課題と展望

最終章である本章では本研究全体を総括し、今後の「話調」研究の課題と展望について考察する。はじめに5-1ではプロトタイプによるカテゴリー化をもとに、イントネーションの離散性の問題について考える。そして5-2では、今後の「話調」研究の向かうべき方向性及び課題について考察するために、各章ごとの概要を再度確認する。その上で、これまでのイントネーションの実証研究の結果から各種談話の韻律構造がどのように構成されているか、それが言語にとってどのような意味を持ち得るかについて述べる。最後に5-3では本研究を通じて明らかになった問題点や課題、特に今後の「話調」研究の方向性について考える。

### 5-1. イントネーションの離散性

本研究第3章では句末イントネーションを6種に分類し、それぞれに名称を与え、ある意味でこれらを音韻論的に扱ってきた。つまり、音素の対立のように互いに離散的であり、それぞれに互いに他と弁別的な存在で、それぞれ異なった意味や機能を持つとの仮定の上で、これらを6種に分類し、記述してきた。しかし、実際に音声的な現実を目の当たりにすれば、誰もこの仮定自体がもう一度問い直されなければならないのではないかとの考えに至るだろう。ここでは認知言語学におけるプロトタイプによるカテゴリー化の理論的知見から、この問題について考える。はじめにこのプロトタイプ・カテゴリーの理論的概要について述べ、次いで本研究及び他の実証的なイントネーション研究からイントネーション知覚の離散性について具体的に検証し、こられを踏まえた上でイントネーションの離散性の問題に関する考察を深める。

#### 5-1-1. プロトタイプ・カテゴリー

本研究において認知言語学やプロトタイプ理論全体について詳細に吟味することは不可能であるが、プロトタイプによるカテゴリー化の理論はイントネーションの種類や意味、その認知を包括的に考えるための一つの糸口として重要な視点を提供してくれるものと考えられる。そこで、十分とは言えないまでも、はじめにこの概略を把握しておく必要があるだろう。

プロトタイプ・カテゴリーというのは、認知心理学で主要な問題とされるカテゴリー化に関する一つのアプローチにより得られたカテゴリー化の方法の一つであり、従来の古典的なカテゴリー化理論の基盤を覆すような経験的成果から生まれたという(Taylor 1989, テイラー 1995, Smith, E. E. and

Medin1981)。またレイコフ(1987, p.7)によれば、カテゴリー化の古典理論は「アプリアリな推測に基づいて得られた哲学的見解」であり、「ほとんどの学問分野において経験的仮説ではなく、議論の余地のない当然の真実として教えられてきた」という。そして、古典的なカテゴリー化の理論、つまりカテゴリー化の古典的アプローチは、Taylor(1989)、テイラー(1995)によれば、古代ギリシャ、特にアリストテレスにまで遡ることができるもので、(1)カテゴリーは必要十分な素性の連言によって定義される、(2)素性は二項対立的である、(3)カテゴリーは明白な境界を有する、(4)カテゴリーのすべての成員は等価の地位を有する、という基本前提があるという。さらに現代言語学(特に構造主義と生成文法の両者を含む自律的言語学)においては、これらの前提に基づきアリストテレスのモデルをさらに精密化させてきたという。

一方これに対してプロトタイプ的なカテゴリー化は、色彩語に関するBerlin他(1969)やHeider(1971,1972)、Kay(1975)、Kay他(1978)の研究、Labov(1973)のカップやボール、花瓶などの容器の言語的カテゴリー化に関する実験的調査、Rosch(1973,1975)によるカテゴリーの典型事例判定についての調査結果に加え、ウィトゲンシュタイン(1936-49)で論じられる「ゲーム」という単語を説明する際に用いられた「家族的類似」のメタファーなど、古典理論に対する様々な経験的反例の存在から導き出されたものである。つまり先に挙げた古典理論では当然とされる諸前提が必ずしも成り立たないようなカテゴリー化のアプローチがあるという立場に基づく。

特に、先述の色彩語に関するHeider(1971,1972)、Rosch(1973)などの一連の研究では、構造主義言語学が扱わなかった「知覚」が取り入れられた。その結果、色彩自体は連続的に変化するスペクトルであっても、人間の知覚は必ずしも連続的にはなっていないこと、焦点色(赤の中でも、もっとも「典型的な」赤など)が指す範囲が、言語の違いを超えて同じように限られていること、そして、それらが他の色よりも記憶・習得されやすく、明らかに認知・知覚上の顕著な優越性(perceptual-cognitive saliency)が見られることが指摘された。またRosch(1973)によれば、鳥や乗り物など知覚に関わらない語の意味に関しても、より典型的な鳥や乗り物があることが実証的に示され、Rosch(1975)の調査により、カテゴリー(例えば家具)の成員それぞれ(椅子やテーブル、掛け時計、鏡など)は、カテゴリーへの帰属の度合いが必ずしも一定でなく、ある成員(椅子やテーブル)は他の成員(掛け時計や鏡)に比べ、より典型的な成員であるとみなされることが明らかになった。これは色彩などの知覚に関わるカテゴリーだけでなく言葉のカテゴリー(意味)についても、その内部に構造(中心と周辺)があること、つまりカテゴリー内は必ずしも均質でないことを意味している。

また、これらの成果に基づき、Kay他(1978)は、色彩語に関しては少なくともサピア・ウォーフの仮説に見られる極端な言語や文化の相対化はその妥当性が制限され、また相互に離散的に対立する弁別素性の存在を想定する伝統的な意味論よりもファジー集合論的なモデルがより適切であること

を指摘している。「国会議員」という言葉は通常の集合論のように、そうであるかないかでカテゴリー化できるが、色彩語や「グルメ(gourmet)」などの言葉は「A氏はB氏よりグルメだ」と言えるとして、Zadeh(1965, 1971)のファジー集合の概念を概説している。)

Lakoff(1978)が生成文法派の前提を批判して、言語は感覚運動及び認知の発達、知覚、社会的相互作用、その他の経験などから切り離すことはできないと指摘しているように、認知言語学の特徴は言語を自律した記号体系として見るのではなく、非自律的な体系であると捉えている点もその特徴である。その上で、カテゴリー化に見られる中心・周辺構造、換言すれば典型・非典型構造に着目するのがプロトタイプ・カテゴリーの特徴であろう。テイラー(1995, p.63)は、プロトタイプ・カテゴリーの認識論的重要性に関するGeeraerts(1985, p.141)の言葉を引用しつつ、カテゴリーの中心は古典的カテゴリーの理想に近く、しかも古典的アプローチに欠如している柔軟性をカテゴリーの周辺のな成員の存在を許容することで獲得していることから、このアプローチは両者の長所を併せ持つものだと指摘している。

したがってレイコフ(1987)及びTaylor(1989)、テイラー(1995)は意味論、形態論、統語論など言語学のあらゆる次元においてプロトタイプ的なカテゴリー化が可能であることを示している。さらにアリストテレス的古典派モデルがもっとも効果的だと考えられる音韻論においてさえもプロトタイプ的なカテゴリー化の原理を持ち得るとした。その例としてレイコフ(1987)はJaeger(1980)の実験を挙げ、テイラー(1995)は、英語の音素 / t / の成員である音声を10種以上挙げ、それらが意味論的に多義的な項目の家族類似性に基づく構造と類似していることや、また従来当然とされてきた二項対立的な、ある素性の有無によるカテゴリー化がJaeger他(1984)の英語子音の認知実験結果により疑問視されていること、「聞こえ」という知覚上のファクターを考慮に入れると、例えば従来[vocal]によって定義されるような母音カテゴリーの成員が、すべて同等に地位を持つことはなく(つまり先の(4)に反する)、さらに子音との境界もはっきりした相互排除的な類とならない(先の(3)に反する)ことなどが挙げられている。

またイントネーションに関してもTaylor(1989)、テイラー(1991, p.191)は、韻律の多義性という点から、多義語において用いられるような中核的意味による説明には妥当性がないこと、イントネーションのカテゴリー化には家族類似的構造が見られることを指摘している。中核的意味による説明というのは、多義的語彙項目のすべての意味は一つの中核的意味を共有するという必要条件に基づくカテゴリー化の古典的理論に由来するものだという。しかし、先に挙げたLabov(1973)のカップなどの容器について行った言語的カテゴリー化に関する調査から、カップと称せられるものの範囲は非常に広く(多義的で)、それらすべてがカップを定義付ける一組の特徴の集合を共有しているわけではないことや、英語のclimbという多義語に見られる家族的類似カテゴリー構造など、この点についての

反証が挙げられている。古典的な中核的意味によるカテゴリー化では、「ゲーム」などの多義語を定義することはできない。つまり家族的類似性に基づくカテゴリー化のほうが妥当性、汎用性が高いと考えられる。付言すれば「家族的類似」というのは、先に挙げたウィトゲンシュタイン(1936-49)が「ゲーム」という単語を説明する際に用いたメタファーで、家族が皆違う顔をしているのに、皆がそれぞれことなく似ていて一つの家族としてのまとまりを見出すことができるようなカテゴリーに見られる類似性の特徴を指す。このようなカテゴリーの全成員間には、必ずしも共有される一つの中核的意味は見出せないこともある。

イントネーションに話を戻そう。例えば上昇調や下降調の意味というものを考えると、それぞれが多義的であり、その中から共通の中核的意味を抽出することや、ある音調を単一の中核的意味と関連付けようとする試みは非常に困難であることが指摘されている(Crutenden1981、1986、Oakeshott-Taylor1984)。また日本語のイントネーションについては、意味以前の、連続的な音の高さを区切るというカテゴリー化自体が困難であることは、本研究でも再三述べてきた通りである。次に、主にイントネーションの知覚の問題からこの点を考えていく。

#### 5-1-2. イントネーションの知覚及び意味とそのカテゴリー化

先に色彩語のカテゴリー化についての例を見たが、色彩が物理的には連続的なスペクトルをなすにもかかわらず、人間の知覚は必ずしも連続的ではないということがKay他(1978)などで明らかになった。イントネーションは、主に音の高さの変動によって規定されるが、音の高さも言うに及ばず連続的に変化する。個人差はあるが人間の音声器官の限界内で声の高さを連続的に変化させることもできれば、その連続変化を知覚することもできる。ただし、物理的な周波数の上昇と感覚的なピッチ上昇の度合いは一致しないことは、日本音響学会(1996)、古井(1992)、デニシュ他(1963)などでも指摘されている通りで、すでに人間の知覚にそれなりの特性があることは明白だ。実際、音声の高さの変化は、それが意味を持つかどうかは別としても、意図的に生じさせることもできるし、知覚することも可能である。一見すると色彩の認知に比べ、音程の高い低いに関する認知は、聴覚が正常の人でも難しいという点が異なっているようにも見える。色覚に何らかの障害がある人や幼児を除けば、赤か青か黄色かなどはほぼ誰でも区別でき、水色がより青に近くピンクは青よりは赤に近いことを感覚的に理解したり、色彩名がわからなくても濃紺、濃い青、淡い青を濃い順に並べ替えたりするのがそれほど難しくはない(注1)と予想されるのに対し、例えば周波数400Hz、410Hz、420Hzの音や、ド、ミ、ソなどの音を順不同に聞かせて、音の高い(周波数の大きい)順に並べ替えるのはかなり難しいと思われるからだ。本研究第2章で扱ったいわゆる尻上がりイントネーションが、

上昇は少なく下降が大きいにもかかわらず、一般には上昇と捉えられていたことは指摘した通りだし、日本語のアクセントに関しても、どこに上がり下がりがあるかは訓練しないと意識化するのは意外に難しい。しかし、MacLaury(1987, 1995a, b)によれば、色彩も微妙な違いとなると、色名と実際の色を一致させることはかならずしも簡単ではないようである(注1参照)から、両者の違いは単に程度の違いかもしれない。

いずれにせよ、ある音(色)がある音(色)に比べて高い(赤い)か低い(青い)かを当てるのが難しいからといって、両者の違いが区別されていないわけではない。音に関して言えば、実際楽譜が読めなくても(上手下手はあるが)歌を歌ったり、覚えたりすることはできるし、アクセントやイントネーションについてどこが高い、どこが低いと言語化できなくても、習得することができる。また「橋」と言ったか「箸」と言ったかは、東京式アクセント話者同士ならば、たとえそのアクセントパターンが「高低」であったか、「低高」であったかを説明できなくても、両者を識別することができる。

このように、音の高低が存在し、それが語の弁別に役立っているにもかかわらず、それが高いか低いかを言い当てるのは難しいことは確かだろう。イントネーションの知覚が難しいのも同様の事情によるものと考えられる。その上、イントネーションは話者の心的態度という必ずしも0か1かでは割り切れない、二項対立に還元できないような現象と関わっていると言える。例えば「三等賞だったよ。」という発話は、一方の極に「入賞できると思わなかったのに三等賞がとれた」という「喜び」の感情を伴い、他方の極に「絶対に一等賞が取れると確信していたのに三等賞だった」という「落胆」の感情を伴うことがあり得るだろうが、どこから「落胆」(あるいは「喜び」)の感情が「有り」と認められ、どこから「無い」と認められるのかは非常に微妙だろう。

しかし一方で、相手に質問されたのか、相手がただ意見を述べただけなのかに関しては、ほとんどの場合、迷うことはないだろう。ただし、聞こうと思って発話しかけたが、相手の顔色を伺ううちに聞いてはいけない雰囲気を感じて意図的に曖昧なイントネーションにしてしまうことも現実には可能であろう。このような点を見ると、イントネーションについてもプロトタイプ的なカテゴリー化が有効なのではないかと考えられる。

本研究では日本語(本研究では東京を中心とする共通語)の言語体系の中で、句末イントネーションには平調、上昇調、下降調、強調、昇降調、停滞調の6つのカテゴリーがあると考えてきたわけだが、それぞれの中心的な部分はおそらく他と紛れることはないだろう。しかし、周辺部に関しては、必ずしも明確な境界を引くことはできそうもない。それは本研究の第2章、第3章からも明らかだ。これは先述のCruttenden(1981, 1986)、Oakeshott-Taylor(1984)によって指摘されている英語の音調の多義性の問題が、日本語のイントネーションにも無関係ではないと考えれば、当然のことだろう。

このことは、英語のイントネーションにおける研究や本研究の第3章(3-2-3)でのイントネーション

ンの聴取実験の結果だけでなく、ごく最近行われた日本語のイントネーションに関する杉藤(2001)、森山(2001)の知覚実験の結果からも明らかである。

杉藤(2001)によれば、日本語の終助詞「ね」については「聞き手への反応要求」と「自己確認」の機能があるが、「ね」の上昇度合いを次第に下げるにつれて、「聞き手への反応要求」から「自己確認」であると判断される可能性が高まることが明らかになったという。しかし、一方でこの境界は非常に曖昧で被験者の判断に揺れがあり、実際「聞き手への反応要求」でない場合にも上昇調の「ね」が現れることが明らかになったという。このことは、音声としてのイントネーションを完全に離散的にカテゴリー化することが困難であると同時に、一まとまりの音声的な条件によってのみイントネーションの意味をカテゴリー化することが困難であることを示していると言える。

また森山(2001)は、「この本いいね」という発話に対する「この本借りていいね」および、「この本はいい本だね」という二つの意味解釈が、「ね」のイントネーションの変化によってどのように変わるかについて知覚実験を行った。その結果、上昇の度合いが高いほど、前者であると判断する被験者の割合が多くなるものの、どのようなイントネーション(ここでは急上昇、上昇、緩上昇2種、平坦、下降の6種)であっても両方に解される可能性があることが明らかになった。さらに森山(2001)は「君、行きますね」という「ね」の部分が明示的上昇調(急上昇)の発話と、「私は嫌ですね」の「ね」の部分に、あまり一般的にありえない「君、行きますね」と同様の明示的上昇の「ね」を付与され発話された音声の2種を被験者に聞かせ、それぞれ「自然」か「不自然」かを問う知覚実験を行った。その結果、前者を「自然」とした被験者は97%、後者を「不自然」とするものが85.3%、「自然」とするものが15%いたという。これらの実験結果からも、音声面だけでなく意味の面でもイントネーションの完全な離散的なカテゴリー化が困難であることは明らかだ。

また、森山(2001)は「そもそもプロソディは物理的現象面では連続性を持ちつつも、意味表象機能としては、典型性をもとにした質的差異を見せるということがある。」と指摘している。これは、イントネーションが特に意味の部分でプロトタイプ・カテゴリーであると示唆しているものと考えられる。そうであれば、イントネーションの意味や機能を上昇の度合いなどの音調の一条件でそれを規定することにはあまり意味がないのではないかと考えられる。また、だからこそ物理現象面でも連続性が強く見られるのではないかと考えられる。このことは、各イントネーションの型の区別が不要であるとか、意味がないということではない。少なくとも各カテゴリーの中心部分は互いに離散的であろうと考えられるし、それぞれに典型的な意味や機能があることを否定するものではない。より「赤」らしい「赤」があるのと同様、より「上昇調」らしい典型的な「上昇調」があると考えられる。

次に本研究で得た日本語の句末イントネーションの6類型について、その離散性と連続性について

音声と意味の面からもう一度検討を加える。

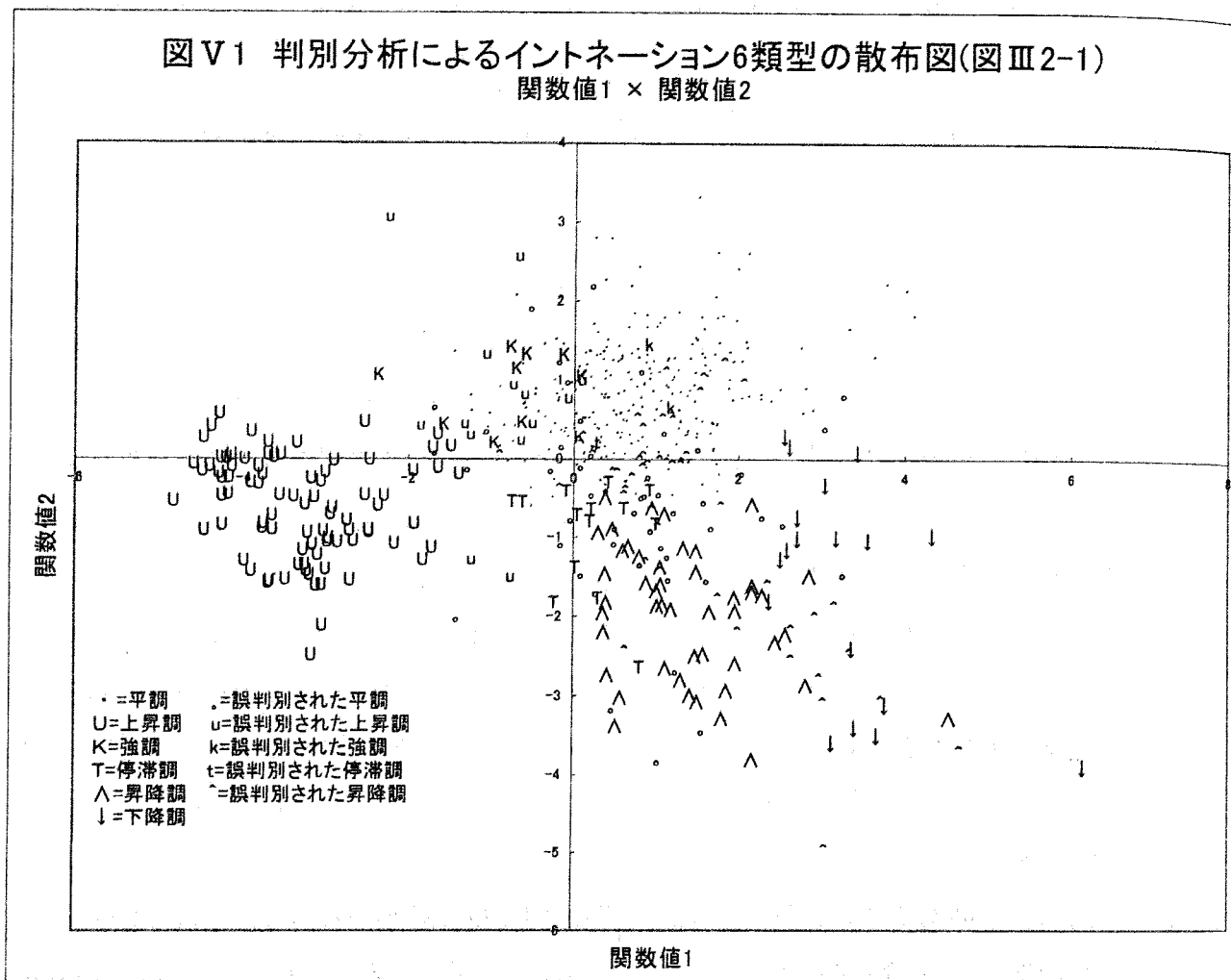
### 5-1-3. イントネーションの離散性と連続性

本研究第3章では判別分析を行い日本語の句末イントネーションを6種に分類した。13人分の分析対象音声のうち1人を除く12人分は、朗読や討論などの、誰でも耳にする可能性がある実際の発話から採取したものである。全体的に改まった場面での発話が多かったが、それでも読み上げ音声に比べれば、非常に多様な音声的バリエーションが見られた。これらの音声を類型化する作業は、筆者が一人で行った。上記の分析対象の音声のうち、あるものは迷うことなく6種のどれかに当てはめることができたが、非常に迷うものもあったことも事実である。特に昇降調か停滞調か、平調か停滞調か、強調か昇降調か、上昇調か強調か、などで迷うものがあった。さらに、3-2-3でも述べたように、筆者の6分類がどの程度妥当であったか確認するため、小規模ではあるが、12名の被験者による「反問調」のイントネーションを加えた7種のイントネーションの聴取実験を行った(表V1、表IIIと同じもの)。刺激音は筆者による典型的と思われる音声であり、一概に筆者の聞き取り結果と比較することはできないが、この聴取実験でも昇降調の正答率は最低であり、下降調や反問調もそれに次いで低い正答率だった。

第3章で示した判別分析結果に基づく各音声の散布図(図V1、図III2-1と同じもの)からもわかるように、判別結果も完全に離散的分布を示すとは言えないし、筆者の聞き取り結果も、典型的な音声を使った聴取実験の結果も離散的とは言いがたい。ただし、筆者の聞き取りの結果は、各イントネーション型に分類された音声が無秩序に散らばっているのではなく、同じイントネーション型に分類されたものは、ある程度まとまって分布していることは明らかである。また誤判別されたものの多くはそのまとまりからは遠いところに分布している。さらに表V1から、平調は強調に、上昇調は反問調に、強調は平調に、停滞調は下降調に聞き誤りが集中し、昇降調、下降調は誤答が分散してい

発話音声↓	回答数							各型の正答率		
	平調	昇降調	上昇調	強調	停滞調	下降調	反問調	7種の場合	*6種の場合	
平調(「それで」、「だから」)	13	0	0	2	0	0	0	87%	87%	
昇降調(「そえでえ入」、「だからあ入」)	0	4	0	1	5	3	2	27%	40%	
上昇調(「それで↑」、「だから↑」)	0	0	11	0	0	0	4	73%	100%	
強調(「それで>」、「だから>」)	5	0	0	11	0	0	0	69%	69%	
停滞調(「それでー」、「だからー」)	0	0	0	0	13	3	0	81%	81%	
下降調(「それでえ↓」、「だからア↓」)	0	5	1	4	0	6	0	38%	38%	
反問調(「それでえv」、「だからあv」)	0	0	4	0	2	1	9	56%		
						全体の平均正答		61%	69%	
				*上昇調と反問イントネーションを統合して計算した場合						

図 V 1 判別分析によるイントネーション6類型の散布図(図 III 2-1)  
関数値1 × 関数値2



るなど、興味深い傾向が見られた。

これは、個別のイントネーションに、意味の面だけではなく音声的にも完全に離散的ではなく、典型的なものとはそうでないものがある、つまりプロトタイプ的なカテゴリーをなすことを示すとともに、色彩に置き換えると赤と青とピンクがあるように、イントネーション型相互の分布にもより離散的なものとはより連続的なものがあることを示しているものと考えられる。

次に意味や機能の面から本研究で分類した6種のイントネーション型について考えよう。はじめに本研究では一つの独立したカテゴリーとして扱わなかった、主に「反問」を表すイントネーションといわれる下降上昇調のイントネーションについて考えたい。これは、3-2-3の実験では「反問調」として聞かせたが、上村(1989)の「くだりのぼり」音調とほぼ同じものだと言える。

この音調は、以下に示す筆者の作例のように、普通、相手の言った言葉をそのまま繰り返し、最終拍をやや伸長させて下降上昇イントネーションを付けて発話され、相手の言葉に対する不信感や強い疑念、不快感など示す。ただし、相手の言葉を繰り返さず、「本当」などにつく場合もある。(v



は下降上昇調を示す。)

A: また遅刻↑?

B: や、今日は本当に具合が悪かったんだよ。

A: 本当に具合が悪かったあv。

B: 本当だよ。

母: テストどうだった↑?

子: まあまあだったかな>。

母: 本当おv。

子: 本当だよ。ゆうべは徹夜で勉強したんだから。

母: 徹夜で勉強v。本当にいv。ゲームしてたんじゃないのおv。

客: おばさん、ちょっと、おばさん!

店員: おばさんv。誰がおばさんだって↑?

客: あ、いや、すみません、あの灰皿を…

上記の例のうち、母の「本当おv。」や「徹夜で勉強v。」などは、「本当↑?」や「徹夜で勉強↑!」のように普通の疑問や驚いた発話に見られる上昇調に置き換えることも可能だろう。また、店員の「おばさんv。」も、少し愛想よく軽い気持ちで言えば、「おばさん↑?」になるだろう。これに対して「本当に具合が悪かったあv。」は「本当に具合が悪かった↑?」に置き換えることは他に比べ難しいようである。

下降上昇調の典型としてはこのような典型的な「反問」を第一の機能として挙げることができるかもしれないが、疑念の強さという程度問題になると、上昇調との境界が曖昧にならざるを得ないだろう。音声についての詳しい知覚実験を行ったわけではないが、もし句末部の下降の度合いを漸減させ、上昇調パターンに近づけていき、各段階の音声について「反問」か「疑問」かを問う知覚実験を行ったとしても、先の杉藤(2001)や森山(2001)の知覚実験の結果から類推すれば、その境界が曖昧なものになることはかなり確実だろう。実際3-2-3の聴取実験でも、典型的な反問調で筆者が発話した音声を上昇調(あるいはその逆)に聞き取る被験者がいた。

だからと言って、下降上昇調が一つの類をなさないとは言えないが、たとえ下降上昇調が一つの類をなしたとしても、隣接する上昇調や強調、下降調などの周辺領域が狭まるかもしれないが、そ

これらの中心部分が大幅に変わってしまうようなことはないと考えられる。このような「反問」の発話を多数集めた上で、先の6類型に「降昇調」を加えて7類型での判別分析を行うことは可能であるが、別稿に譲ることになる。

次に本研究で分類した6種の句末イントネーション相互の音声的な連続性と、意味や機能の面での連続性について考える。6種のイントネーションのうち、いくつかのイントネーション間で、どちらであるか聞き分けるのに判断が難しいものがあったことは、先に述べた通りである。以下の表V2かここではイントネーション別に見て、それぞれの型への誤判別率が高かったものについて、これらの類似点を音声と意味の連続性から考える。本研究では資料中に含まれる各イントネーション型のケース数がかなり異なるため、これらを一概に比較するのは難しい。しかし各イントネーション型別にそれぞれの型への誤判別率を見ることで、どの型がどの型に紛れやすいかが比較しやすくなると思った。表V2は第3章での判別結果をまとめなおしたものである。

表V2からわかるように、2群判別による昇降調から平調への誤判別例数は23あり、平調から停滞調への誤判別例数とともに最多だが、平調からの停滞調への誤判別率は、平調だけに限れば7.6%(平調からの停滞調への誤判別数23/全平調数303)であるのに対し、昇降調からの平調への誤判別率は昇降調に限ると24.7%(昇降調から平調への誤判別数23/全昇降調数93)と、より高い割合になっている。割合順に見れば、表V2中の太字で示したとおり、昇降調から平調への誤判別24.7%、強調から平調16.7%、平調から停滞調7.6%、上昇調から強調7.0%、停滞調から昇降調6.7%となっている。このうち強調から平調、停滞調から昇降調への誤判別はそれぞれのケース数が少ないのでさらに検討を要するが、表V1からも、昇降調の知覚の不安定さや強調が平調に誤認される可能性など類似の傾向が

筆者による判別	2群判別の結果					
	平調	上昇調	強調	昇降調	停滞調	下降調
平調(303)	253	3	11	10	23	3
割合	83.5%	1.0%	3.6%	3.3%	7.6%	1.0%
上昇調(100)	5	86	7	1	1	0
割合	5.0%	86.0%	7.0%	1.0%	1.0%	0.0%
強調(12)	2	0	10	0	0	0
割合	16.7%	0.0%	83.3%	0.0%	0.0%	0.0%
昇降調(93)	23	0	2	64	3	1
割合	24.7%	0.0%	2.2%	68.8%	3.2%	1.1%
停滞調(15)	0	0	0	1	14	0
割合	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	93.3%	0.0%
下降調(18)	0	0	0	0	0	18
割合	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%

読み取れる。

はじめに相互の誤判別の割合が全体的に高かった昇降調、平調、停滞調について見てみよう。昇降調と停滞調が共通して、平調と音声的に最も顕著に異なる点は、拍の長さだと言えるだろう。例えば「おじさん」と「おじいさん」、「勝った」と「カッター」について、日本語のネイティブスピーカーならたいていの場合聞き分けはそれほど困難ではないことから、拍の長さというのは、一見するとわかりやすい指標だと考えられる。しかし、「だから言ったろ」と「だから言ったろう」や、「そうだね」と「そうだねえ」などの聞き分けになると、どちらもあり得るし、どちらと解釈してもいい場合が多いせいか、判断が難しくなる。つまり判断が揺れることが多い。長さだけが各イントネーションの違いを規定するものではないことは言うまでもないが、比較的明白そうに見える「長さ」一つとっても実は判断の揺れを抑える切り札にはならないようである。したがって、音調パターンに大きな変動がない停滞調と平調は、互いに紛れやすいということは容易に推測できる。

また音調パターンに関して昇降調は、平調、停滞調に比べて特異だと言える。昇降調のピッチパターンは典型的には小上昇後大きく下降するパターンを描くからだ。しかし、第2章でも紹介したが、川上(1993)が指摘しているように、極端な昇降調を嫌う人がいるのを知って、「遠慮」した発話があるためか、特に非文末の昇降調は停滞調と紛れるほど、この起伏が小さいものも実際はある。もし長さが十分ではなかったら平調とも紛れてしまう。このような例は、判別分析結果によれば全昇降調中の24.7%、約4分の1にも及んだ。これが筆者の聞き取りに問題(昇降調を意識しすぎたくらい)があったために出た数字かどうかは、さらに多人数を対象にした知覚実験で確かめなければならないが、少なくとも3-2-3(表V1参照)の調査でも昇降調の正答率は7種の場合で27%、6種の場合でも40%しかなかった。昇降調、停滞調、平調のそれぞれの間に連続性が見られ、境界を明確にするのが難しいと言うことはできるだろう。

さらに、非文末の昇降調(いわゆる「尻上がり」イントネーション)の出現箇所は、その多くが改まった場面では原則として平調が期待される箇所である。つまり両者の最大の違いは文法機能や意味内容の違いというよりは、「文(話)体」の違いであるとも考えられるから、極論すれば伝達内容から見れば「どちらでもいい」ものである。昇降調のあるものは、その音調を嫌うものがあるのを知って遠慮した発音がなされた結果パターンが小さくなったという見方があることは先に述べた。これは、同じミニスカートにも、膝上18センチのものもあれば、膝上10センチのものがあるのにも似ている。このような程度差による境界の曖昧性もプロトタイプ的カテゴリーであることの証左ではないかと考えられる。

また停滞調と平調については、音声的には長さ以外の違いを見出すのは難しく、長さについての知覚も確実に離散的だとは断言できないだろうと先に述べた。意味や用法の面ではどうだろうか。

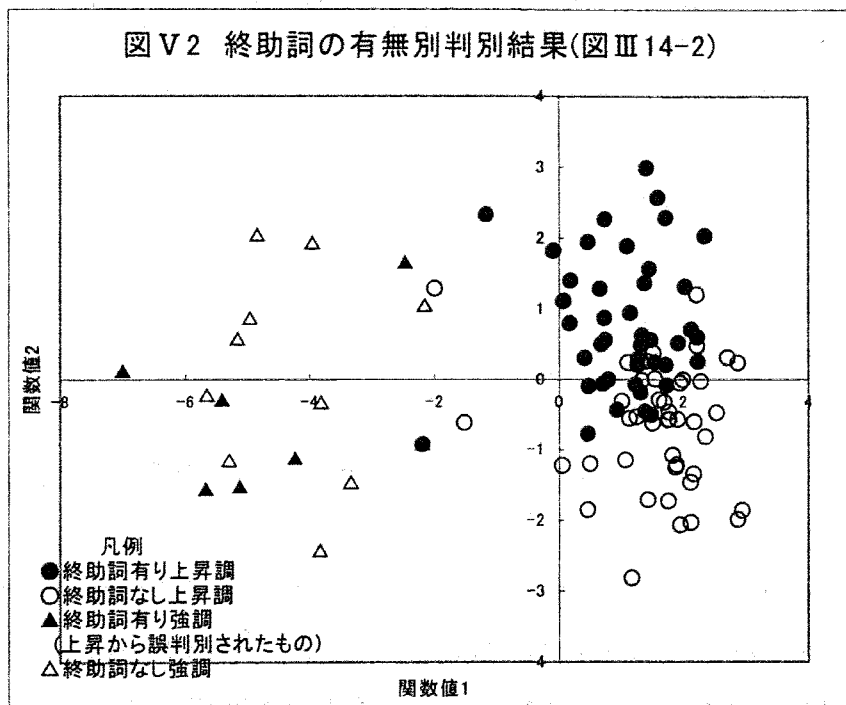
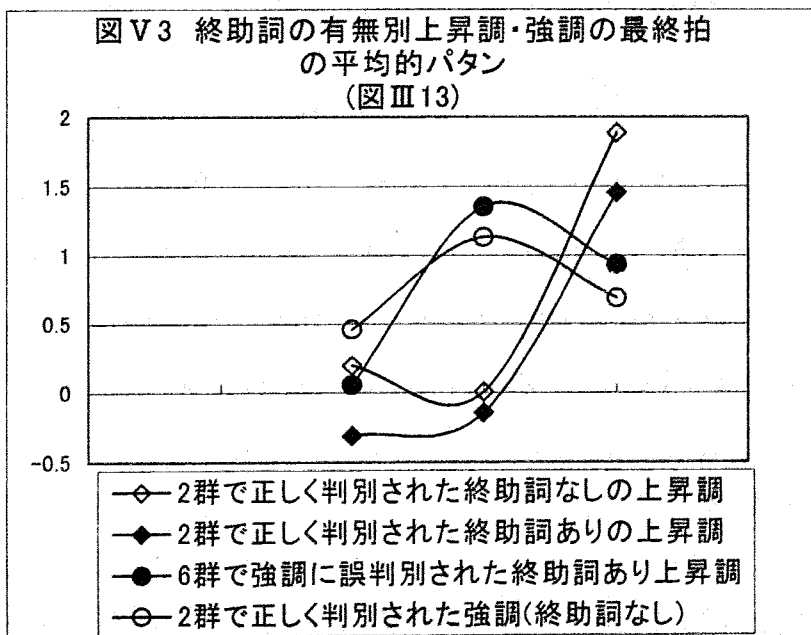
停滞調の持つ、発言権を保持したまま次に言う言葉を探す時間を稼ぐ機能は、発言権がある程度保障されていれば、「それでー 私は…」や「私ーが 考えるには…」と最終拍を伸ばさなくても、「それで(+長めのポーズ) 私は…」や「私(+ポーズ) が 考えるには…」のように発話される可能性もある。ただし、後者のように、普通切れ目の現れない箇所にポーズを入れると、聞き手に「どうしたのだろう」と思われる可能性は高くなる。しかし、伸ばすか伸ばさないかには、非文末の昇降調と同様、ある程度文(話)体的な制約もあると考えられる。非文末の昇降調と同様、多くの場合、平調と置き換えることが可能であり、それによって伝達内容を大きく変更するのではないから、やはり境界が曖昧になりやすい、ということは理解できる。

平調、昇降調、停滞調に関して言えば、音声的にも連続性が見られ、機能的にも伝達内容の変更に影響を与えず、文(話)体の違いによる程度差がより大きく影響しているという点で相互に連続性が見られる。しかし、伝達内容に変更をきたさなくても、「表し方」を変更することは、言語コミュニケーションにとっては重要なことである。だからこそ、典型的にはそれぞれ独自の音調パターンを持つものと考えられる。「場面差」が程度差であるといっても、「場面」の特性から派生する各イントネーション型の持つ談話機能の違いの存在は否定できないし、それぞれのカテゴリーの中心は、離散的と言えるだろう。

次に平調、強調、上昇調に関して考える。表V2を見ると12例の強調のうち、平調に誤判別された率は16.7%だが、それは2例だけである。しかも、この2例はいずれも非文末の位置(fish21「けれども」とfish31「ますので」)に現れた、いわゆる「先生口調」のような効果を狙った強調だと考えられる。より改まった場面では平調に置き換えられたであろうし、一方、話者がもっと若ければ昇降調を使ったかもしれない箇所である。したがって、先に見た昇降調や停滞調が平調に紛れるのと同様の理由から、この強調も平調に紛れ得るものと考えられる。3-2-3の実験では筆者による典型的な平調を強調に聞き取ったものが延べ2人(同15人中)、逆に強調を平調に聞き取ったものが延べ5人(同16人中)あった。

また、上昇調100例のうち、強調に誤判別された率は7.0%、7例だった。ただし、筆者が上昇調に分類した100例には、上昇イントネーションを伴う終助詞が含まれ、これは強調か、上昇かを判断せず全て強制的に上昇調に分類した。全体の的中率を下げた原因の一つでもあると考えられることは3-2-5で述べた通りである。実際、3-3-2でも述べたように、終助詞のない上昇調だけで見ると的中率は約96%で、すべて含めた上昇調内での的中率86%(2群判別では88%)よりも高くなる。さらに、強調に誤判別された7例すべてに終助詞が付いている。そして、3-2-5で述べたように、上昇調から強調に誤判別された終助詞を伴うケースは、上昇調の分布域よりは、終助詞を伴わず正しく強調と判別された10例の分布域に、より近かった(図V2=第3章図III14-2)。

図 V 2 終助詞の有無別判別結果(図 III 14-2)

図 V 3 終助詞の有無別上昇調・強調の最終拍の平均的パタン  
(図 III 13)

この点を総合すると、上昇調から強調への誤判別がまったく起こり得ないとは言えないまでも、少なくとも終助詞や間投助詞がついていない場合はほとんど紛れることはないと言えそうである。また、終助詞を伴うものでも、ピッチパタンを見ると強調の典型は山なりの型を示し、上昇調は、終助詞を伴わない上昇調ほど末尾が高くなりはしないものの、典型的には末尾ほど高くなる型を示している(図 V 3=第3章図 III 13参照)ことから、両者の区別は相当程度可能だと考えられる。先述の 3-2-3の調査(表 V 1)でも、強調を上昇調に、また逆に上昇調を強調に聞き取るケースは見られない。

これは、上昇調か強調かの違いが、伝達行動の質や伝達内容そのものを左右することによって考えられる。つまり、「絶対来る！>」と「絶対来る？↑」や、「本当にいいの！>」と「本当にいいの？↑」は、それぞれ違うことを意味するため置き換え不可能だということである。いずれにせよケース数を増やしより大規模な知覚実験を行って確認する必要があるが、境界は微妙でも、典型に関しては、停滞調や昇降調以上に離散的だと考えられ、典型への集中度も高いことが予想される。ただし、いわゆる「擬似疑問」(「半クエスチョン」)などの非文末の上昇調や、「先生口調」、「子供の朗読口調」と呼ばれるような非文末の強調は、停滞調や昇降調と似た性質を持つと考えられるから、この限りではないだろう。他のイントネーション型との連続性という問題とともに、同じイントネーション型内部における、文末と非文末という出現位置の違いによるカテゴリーの離散性(連続性)とも関連して行く問題だと考えられる。この点も別稿に譲らなければならない。

以上、本研究の結果からも、各イントネーション型は、典型的な音声は離散的ではあっても、周辺例、境界例に関しては音声的にも意味、機能的にも相互に連続性が見られ、その境界を確定することが困難であることが確認できた。そして、その境界の曖昧さに関しては、各イントネーション型の間で差があり、平調と上昇調、強調のように、伝達内容そのものが違い、互いに置き換えることができないものの方が比較的境界が明確になりそうなのに対し、昇降調、停滞調のように、極論すれば情報内容について差異をもたらさない、程度差であるような文(話)体的な表示機能を持つイントネーションでは、境界が紛れ易いのではないかと予測ができた。したがって、英語やこれまでの森山(2001)、杉藤(2001)など日本語イントネーションの実験的研究の成果と同様、本研究結果からも、日本語のイントネーションの類型に際して、プロトタイプによるカテゴリー化が有効であることが実証的に確認できたものと考えられる。

## 5-2. 各章の概要

ここでは本研究の第1章から第4章までの概要をまとめた上で、本研究が明らかにした日本語音声談話の韻律構造がどのようなものであったか、どのような意味を持つのか明らかにする。特に5-2-1では本研究の言語研究史上の位置付けを明確にし、5-2-2では本研究で取り上げたいいわゆる「尻上がり」イントネーション研究が社会言語学的にどのように貢献し得るのか、5-2-3ではイントネーションの客観的な類型化が確立した意義は何かを再確認する。5-2-4で、本研究を通じて「話調」がいかに科学的分析に耐え得る実在であるか踏まえた上で、5-2-5では各種談話の韻律構造の解明にあたって本研究がどのような学問的貢献をなし得るか、その意義は何かを考える。